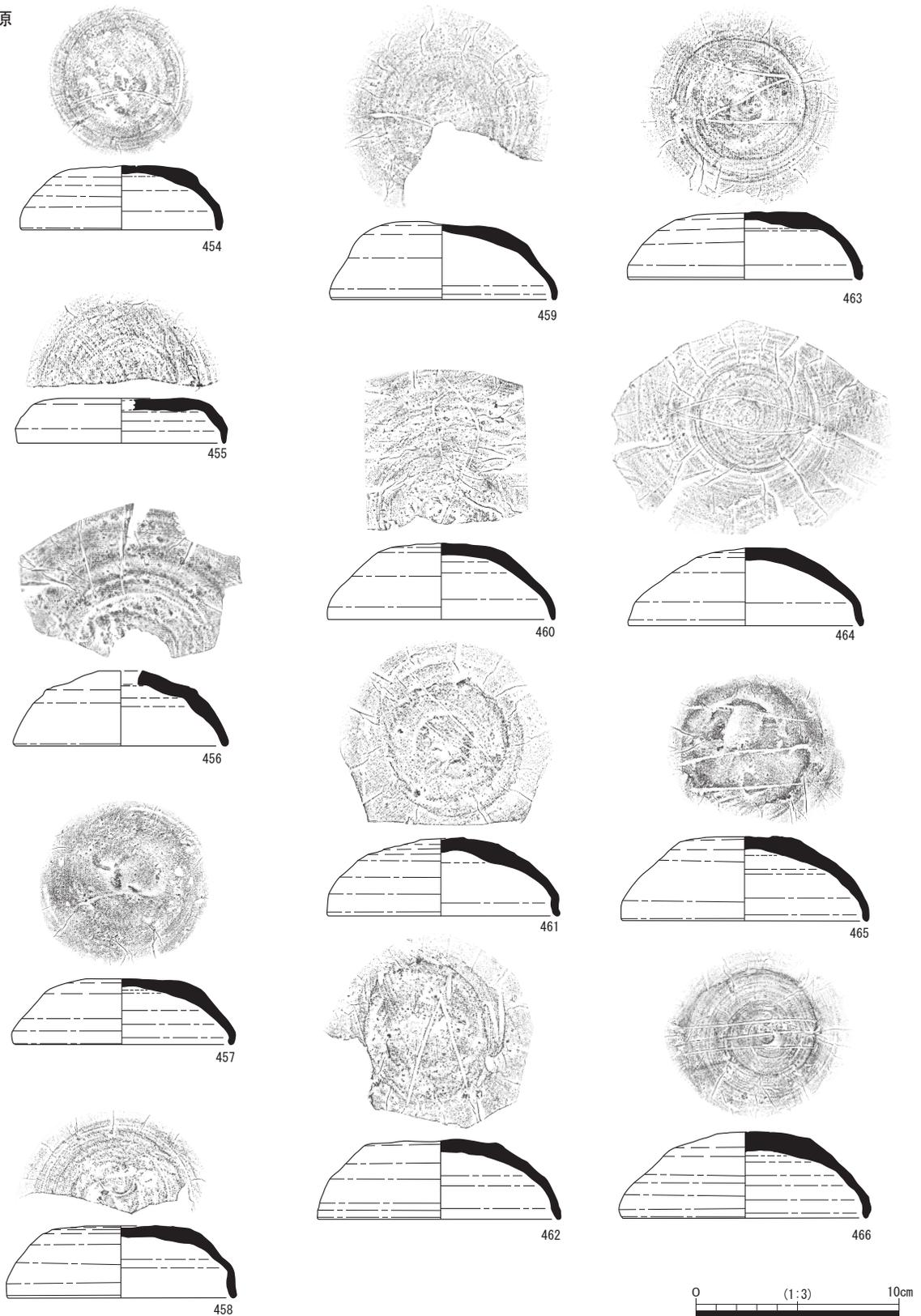


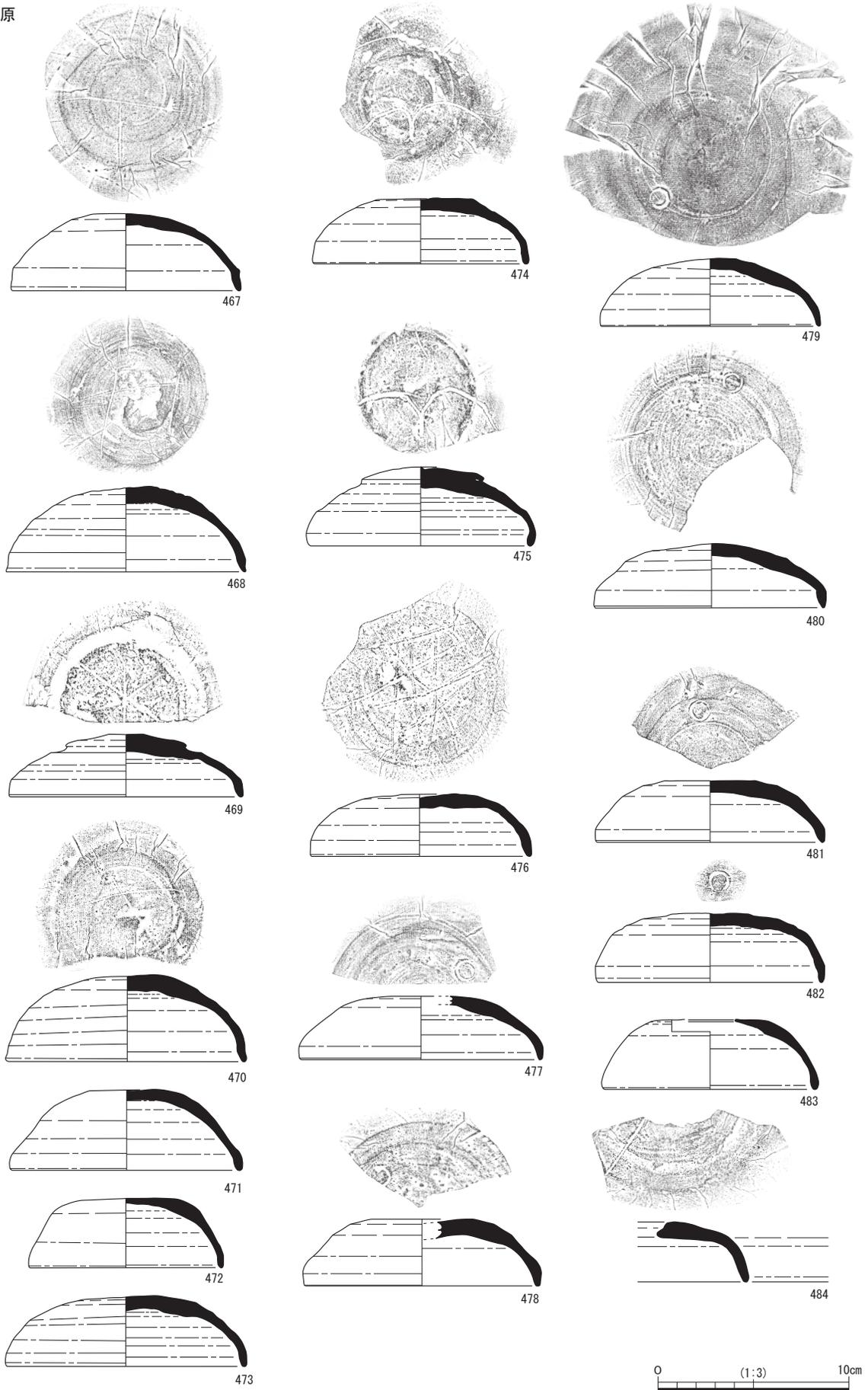
灰原



第60图 2号窯跡出土遺物実測図⑩ (1/3)

灰原

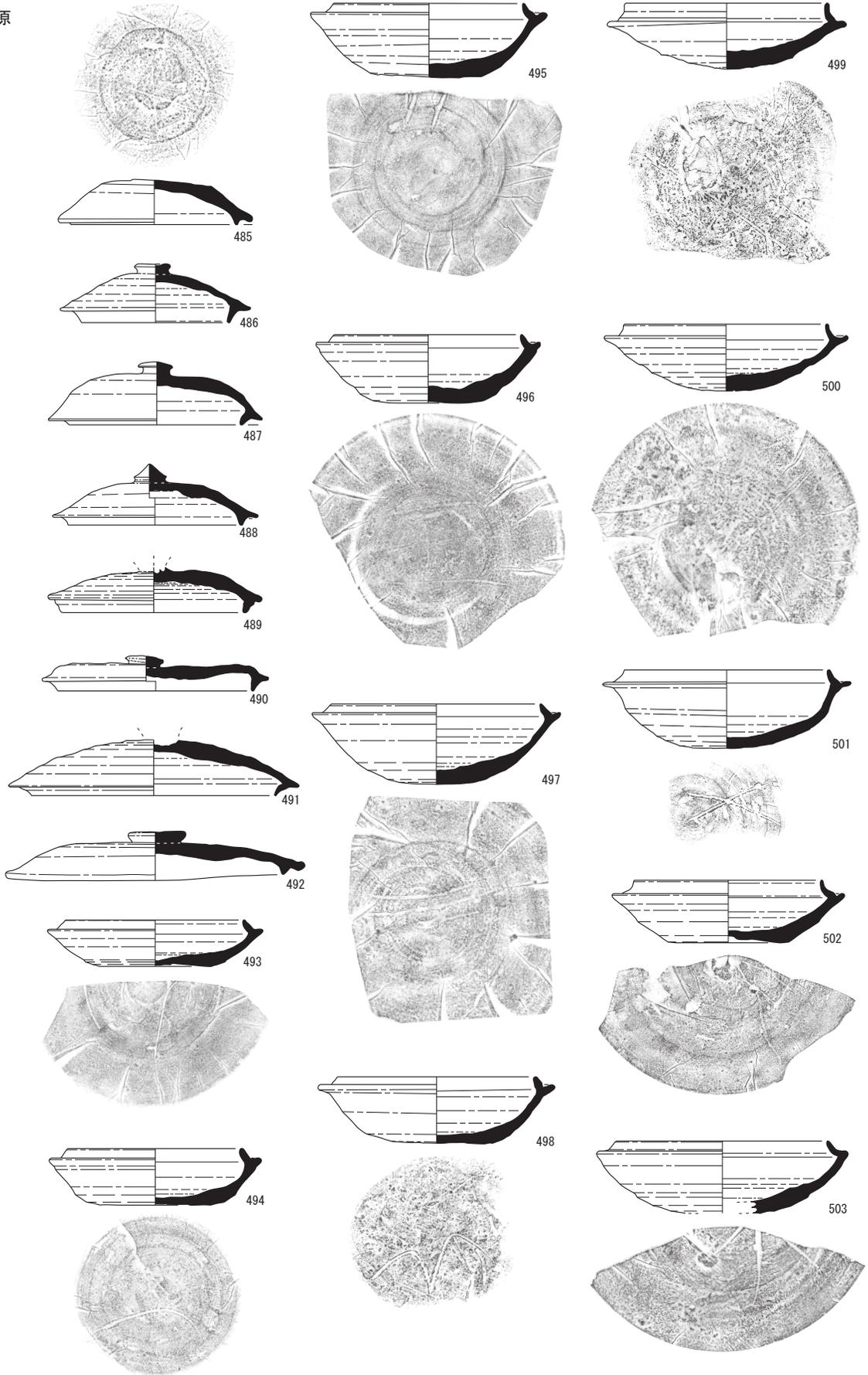
大谷窯跡群



第 61 图 2 号窯跡出土遺物実測图① (1/3)

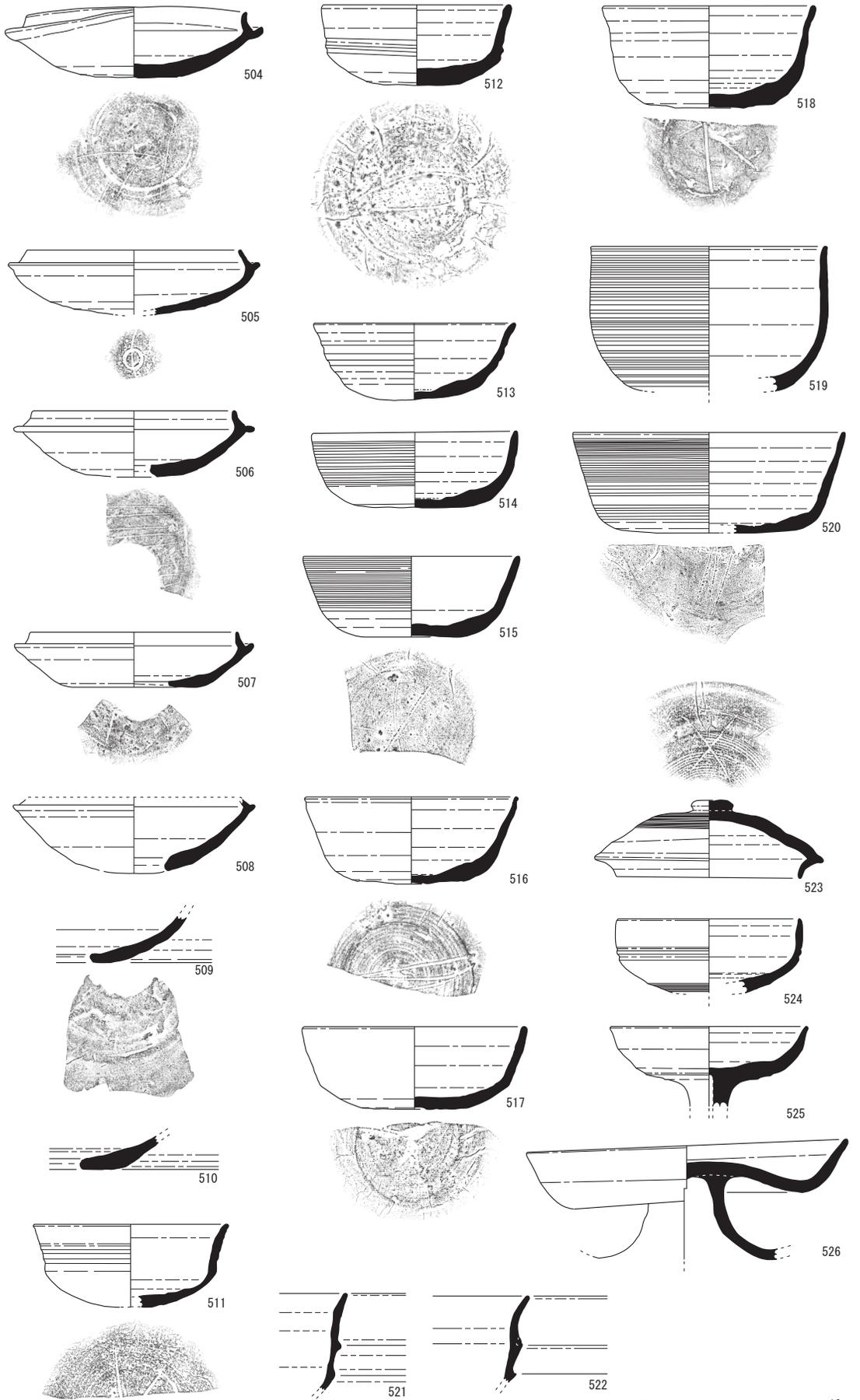
灰原

大谷窯跡群



第 62 图 2 号窯跡出土遺物実測图⑫ (1/3)

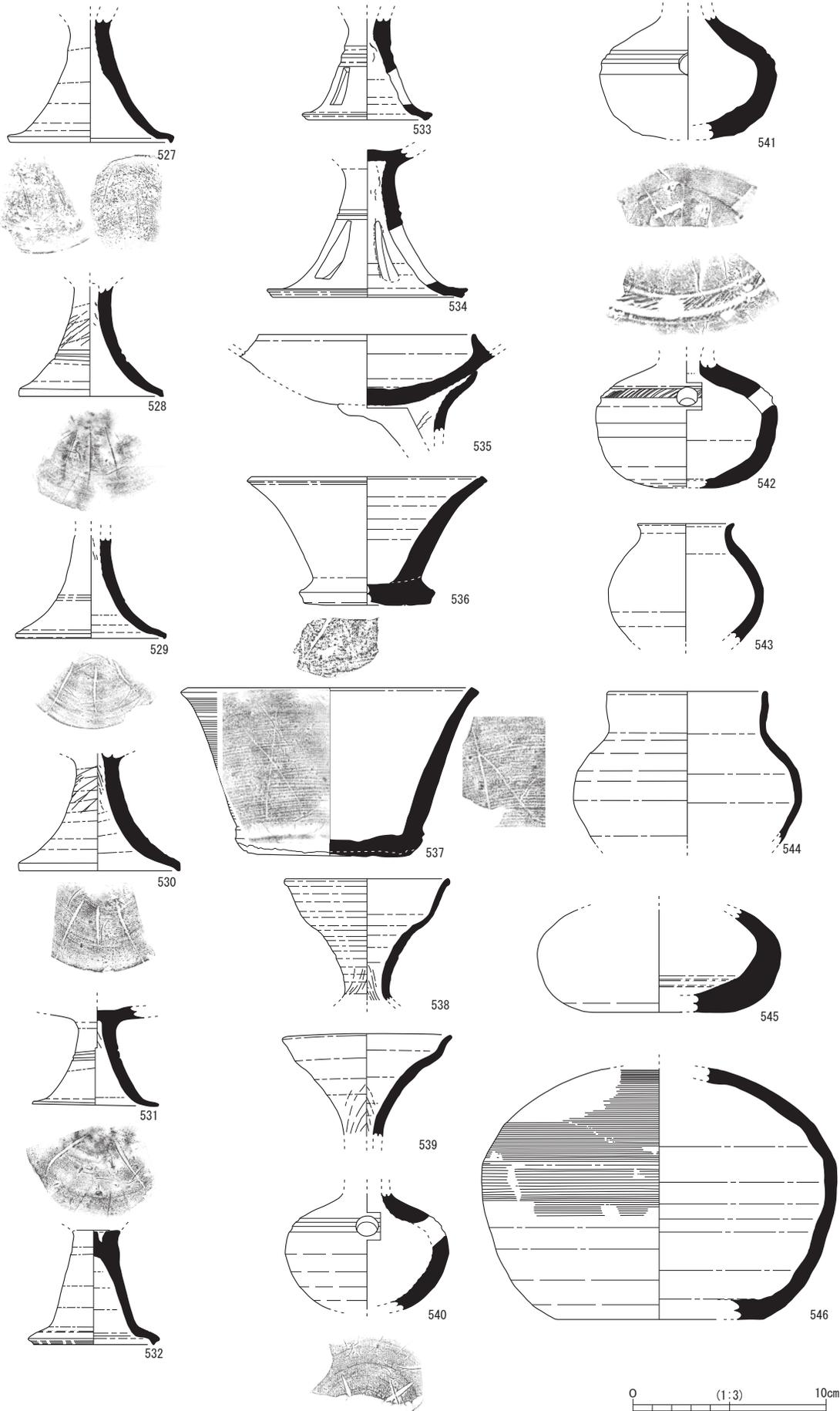
灰原



第 63 图 2 号窯跡出土遺物実測图⑬ (1/3)

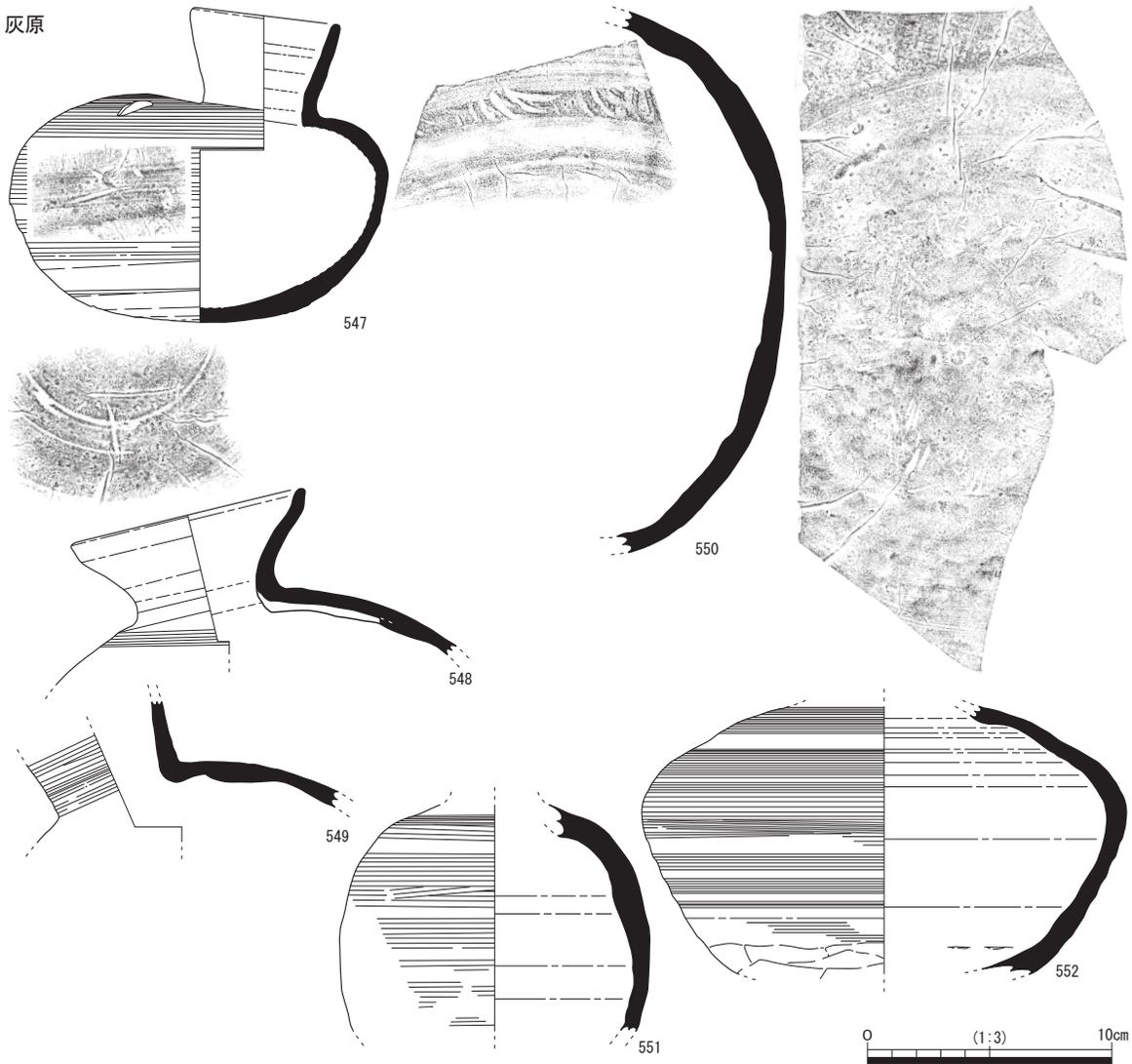
灰原

大谷窯跡群



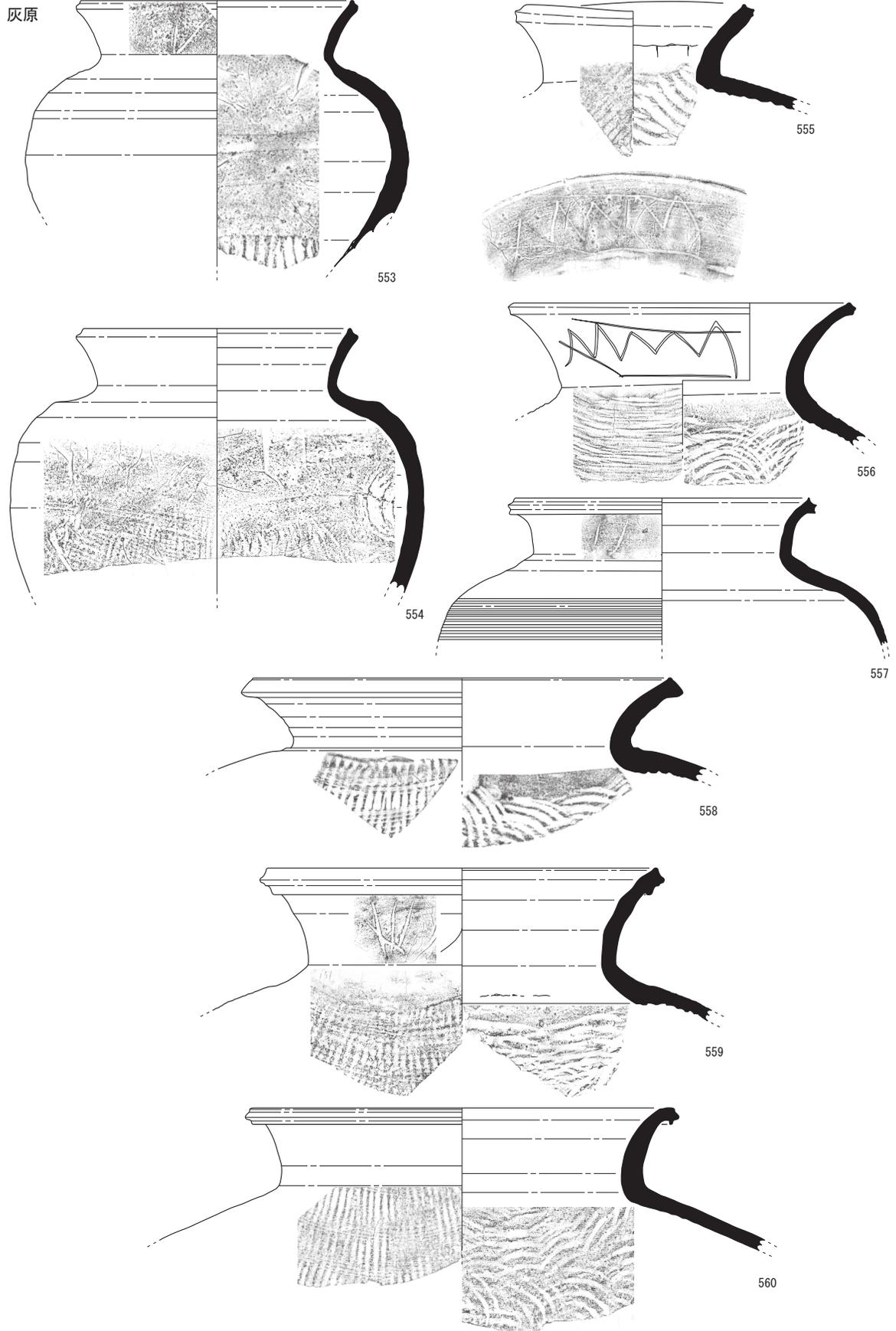
第64图 2号窯跡出土遺物実測图⑭ (1/3)

灰原



第 65 図 2 号窯跡出土遺物実測図⑮ (1/3)

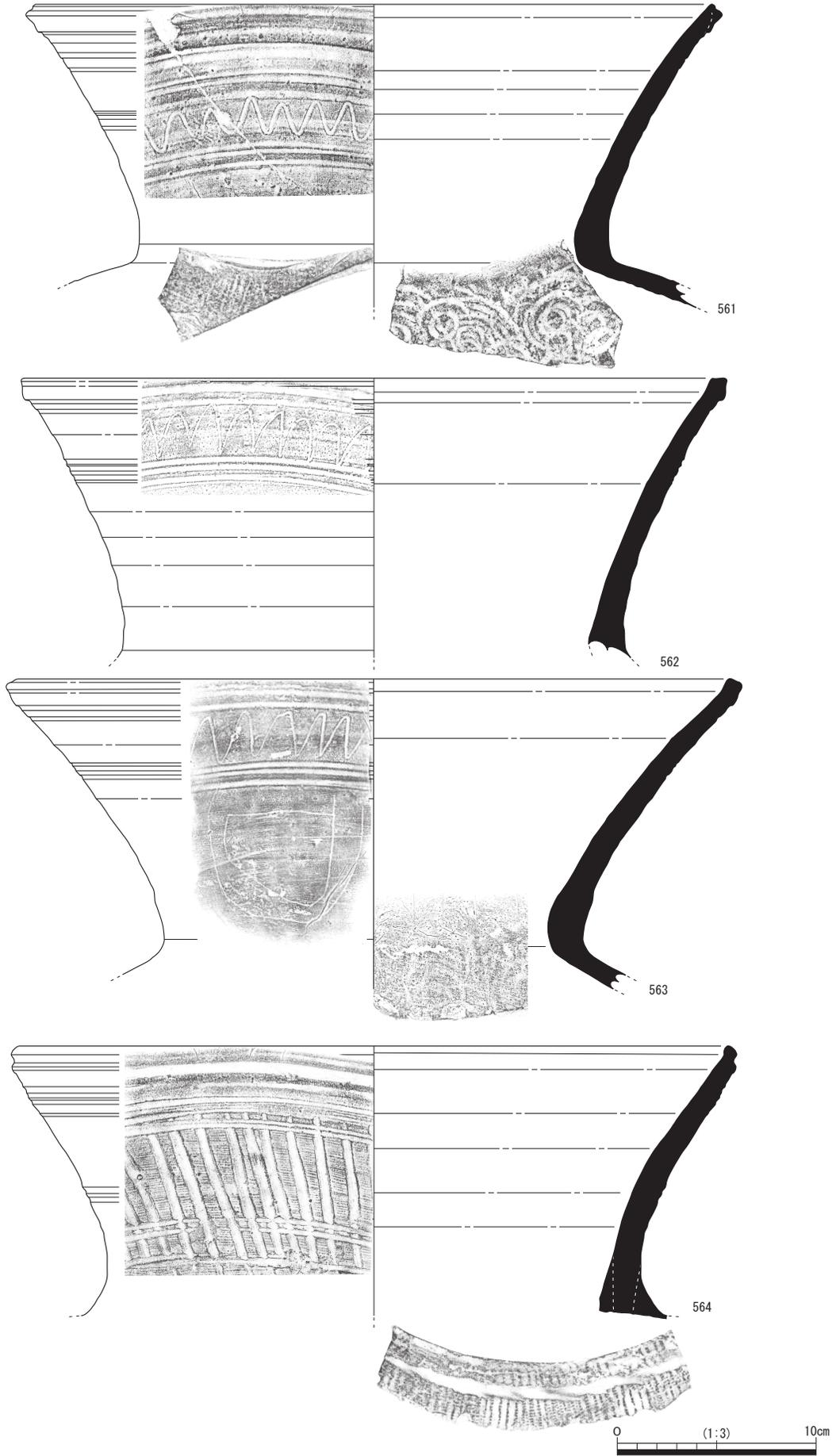
り、他は回転ヘラケズリである。483・484は天井部に焼成前穿孔がある。485～489は杯G蓋で、485以外はツマミを有し、485は天井部にヘラ記号がある。天井部は485がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。490～492は杯B蓋で、口縁部にカエリを有し、天井部は回転ヘラケズリである。493～510は杯H身である。505は外面に竹管文、508以外はヘラ記号を有する。底部は498・499・506・507・509・510がヘラ切り、503が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。506～510は底部に焼成前穿孔がある。511～517は杯G身で、513・514以外は外面にヘラ記号を有する。511～513は外面に沈線、514・515はカキメを施す。518～522は椀で、518・520は外面にヘラ記号を有する。519・520は外面にカキメを施し、521・522は凸帯を有する。523は高杯の蓋で、ボタン状のツマミを有し、天井部はカキメである。524～534は高杯である。524は杯部にカキメを施し、他は回転ヘラケズリである。527～534は高杯の脚部片で、527～531は内面にヘラ記号を有する。533・534は長方形の透かしを施す。535は杯H身と高杯脚部の溶着資料で、降灰のため調整は不明である。536・537はすり鉢（陶臼）で、536は底部、537は体部にヘラ記号を有する。537は体部にカキメを施す。538～542は甕である。538・539は口頸部片で、いずれも受口状を呈する。540～



第 66 图 2 号窯跡出土遺物実測図⑯ (1/3)

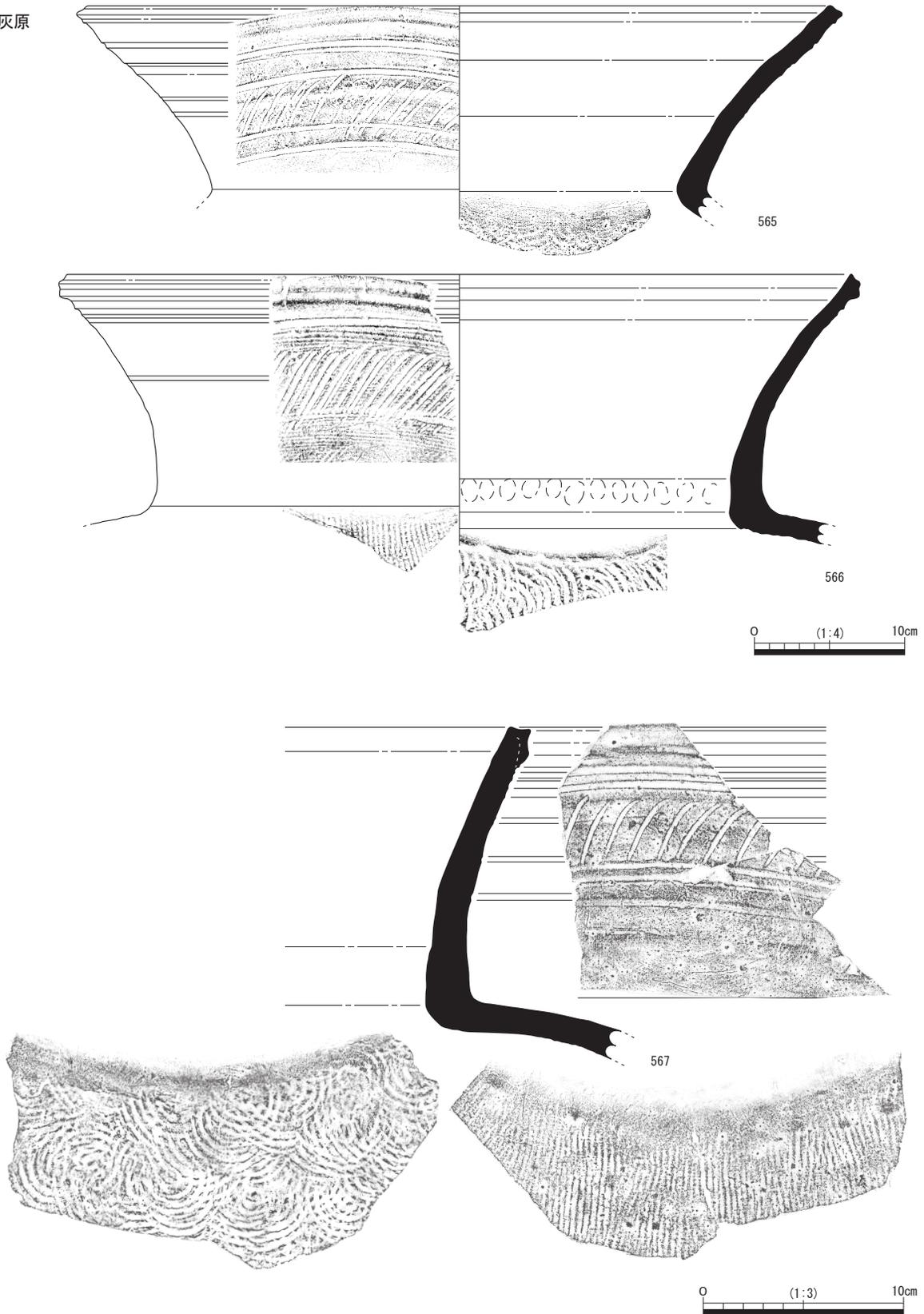
灰原

大谷窯跡群



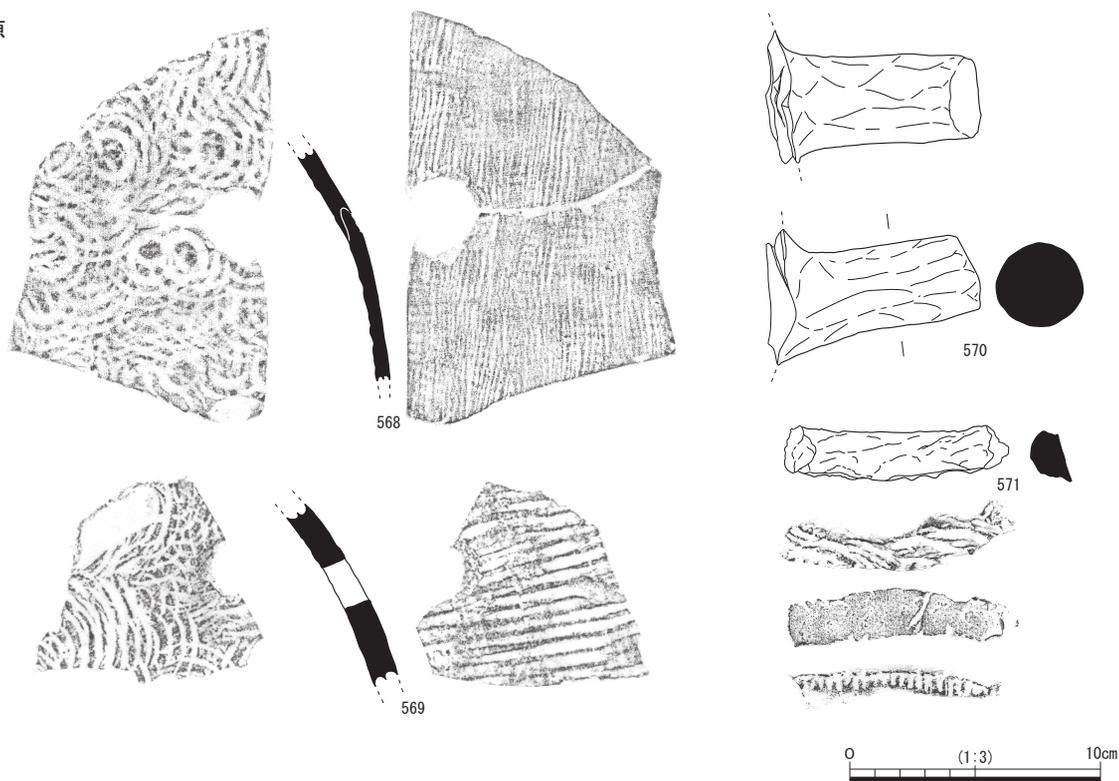
第 67 図 2 号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

灰原



第 68 图 2 号窯跡出土遺物実測図⑱ (1/3・1/4)

灰原



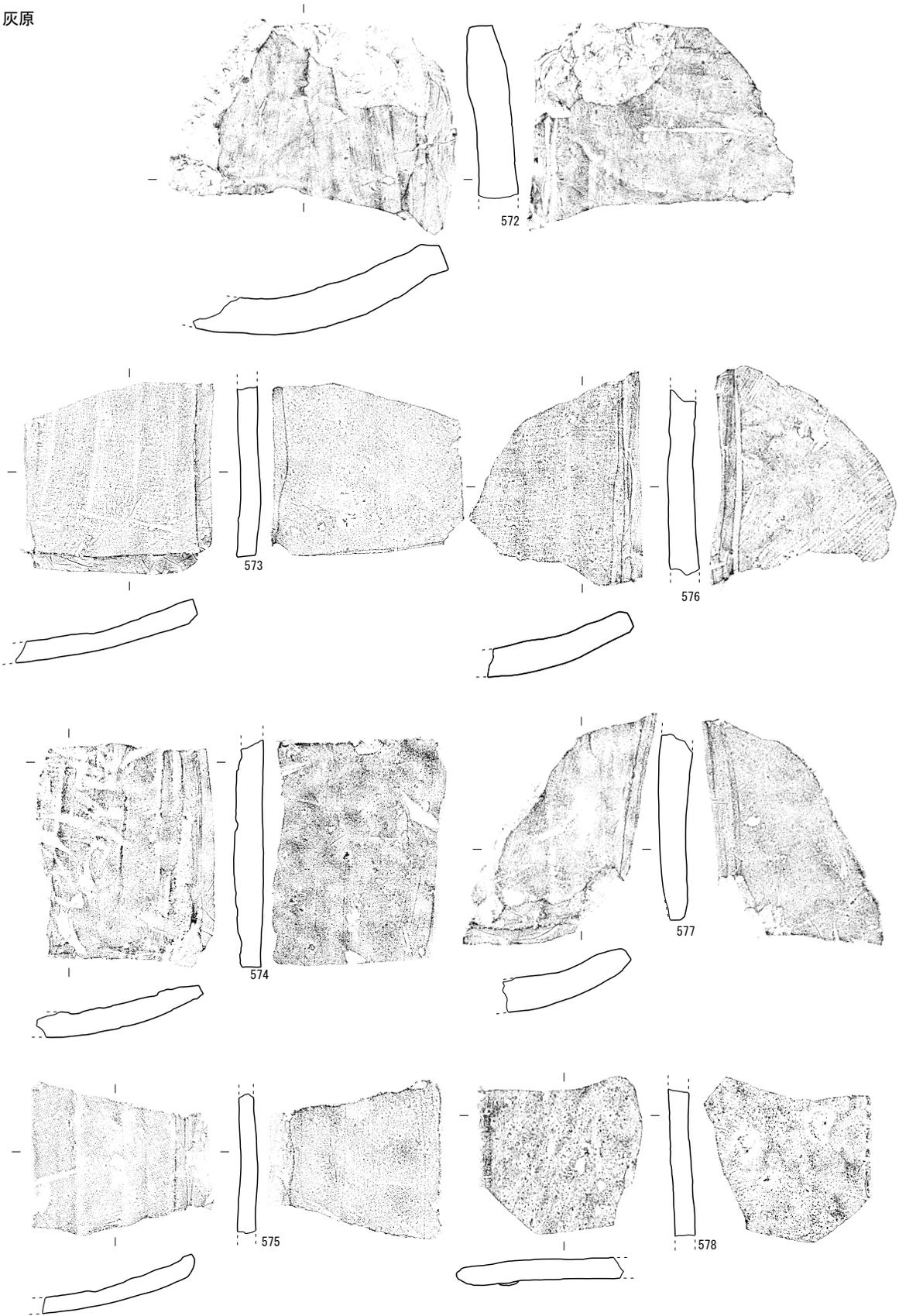
第 69 図 2号窯跡出土遺物実測図⑱ (1/3)

542 は体部片で、540・541 は底部にヘラ記号、542 は肩部に刺突文を施す。543～545 は小型の壺である。546 は瓶類で、底部は平底、体部は扁球形を呈する。体部上半にカキメを施す。547～549 は平瓶である。547 は体部上半にカキメを施し、ヘラ記号を有する。548 は体部上半に、549 は口縁部にカキメを施す。550 は横瓶の体部片で、閉塞痕が残る。タタキ成形後、内外面に回転ナデを施す。551・552 は瓶類であろう。551 はなで肩様を呈し、外面にカキメを施す。552 は扁球形で、体部下半は手持ちヘラケズリ、他はカキメを施す。553～560 は小型・中型の甕である。557 は外面にカキメ、内面には回転ナデ、他はいずれも外面は平行タタキもしくは擬格子タタキ、内面は同心円文・弧状の当具痕が残る。553・556・557・559 は口頸部にヘラ記号を有する。561～567 は大甕である。体部が残るものは、外面に平行タタキもしくは擬格子タタキ、内面は同心円文・弧状の当具痕である。561～563 は口頸部に波状文を施し、563 は線刻状の条線がある。564～567 は口頸部に斜線文を施す。568・569 は焼成前穿孔を施す甕の体部片である。外面は平行タタキ、内面には同心円当具痕が残る。570 は甌あるいは鍋の把手で、443 と同一個体の可能性がある。差し込み技法で体部と接合する。表面は工具ナデ・ナデで、把手先端部を切り落とす。焼成は瓦質である。571 は切削物で、1面は本体から切り離れた際のケズリ、1面は内面の当具痕、1面は本体の平行タタキが転写されている。

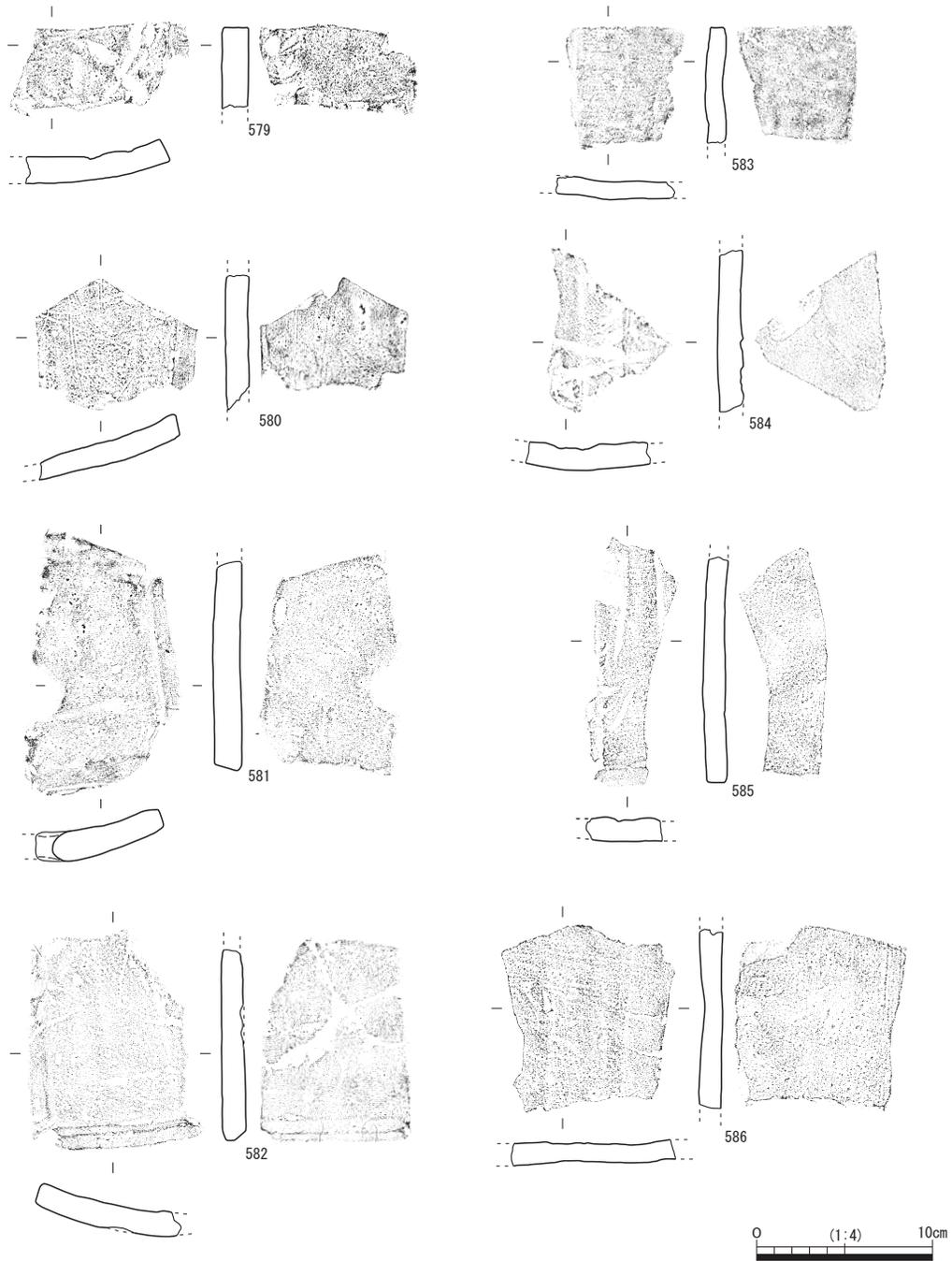
**瓦 (572～590)** 572～586 は平瓦である。焼成は硬質で灰色を呈するものや、軟質で黄橙色を呈するものがある。胎土に1mm程度の白色砂粒を含むものが多い。側縁部と端部は面取りし、側縁部は凹面もしくは凸面に及ぶものもある。厚さの平均は1.5cmで、厚いものは2.6cm、薄いものは1.0cmである。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残る、574 は糸切り痕、580 は線刻がある。572～577 は凸面に平行タタキが残る。581 は焼成前穿孔を施す。587～589 は丸瓦で、587・588 は同一個体で

灰原

大谷窯跡群



第70図 2号窯跡出土遺物実測図⑳ (1/4)

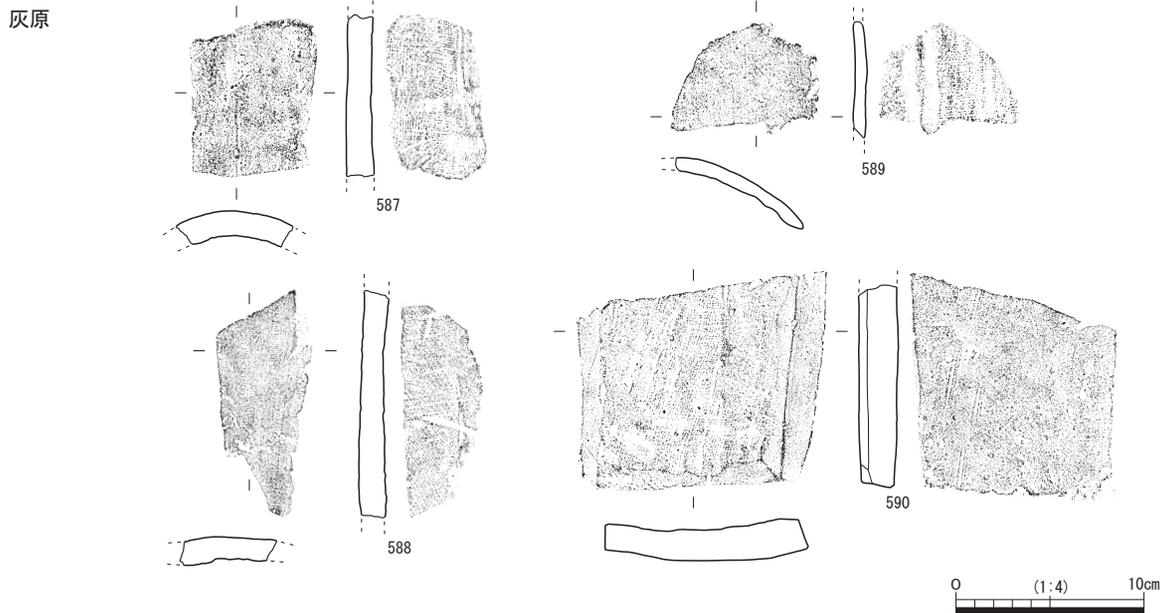


第 71 図 2 号窯跡出土遺物実測図㉑ (1/4)

あろう。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残り、凸面はナデである。589 は厚さ 0.7 mm と非常に薄い。590 は広端部と両側縁部が残存し、幅 11.5cm と通常の平瓦と比べて狭いことから熨斗瓦と判断した。凹面は模骨痕・布目痕が残り、端部を面取りする。凸面はタタキ後ナデである。

【その他 (第 73 ~ 76 図)】

**須恵器 (591 ~ 628)** 591 ~ 601 は杯 H 蓋である。600 を除き外面にヘラ記号を有する。天井部は 595・597・599・600 がヘラ切り、598 が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。601 は天井部に焼成前穿孔がある。602・603 は杯 G 蓋で、603 はツマミを有する。いずれも外面にヘラ記号を有し、602 は天井部にヘラ切り、603 は回転ヘラケズリである。604 ~ 619 は杯 H 身で、いずれも



第 72 図 2 号窯跡出土遺物実測図② (1/4)

外面にヘラ記号を有する。底部は 609・610・612・614・616・617 がヘラ切り、611 が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。615・616・618 は底部に焼成前穿孔、617 は焼成後穿孔を施す。620 は鉢で、内外面ともに回転ナデである。621・622 は小型の甕で、621 は内外面に回転ナデ、622 は外面に平行タタキ、内面には弧状の当具痕が残る。623～626 は大甕で、625 は無文、他は口頸部に斜線文を施す。627 は甕の体部片で、破断面に二次焼成を受けていることから、焼き台の可能性はある。外面に平行タタキ、内面には同心円当具痕が残る。628 は焼成前穿孔を施す甕の体部片で、外面に平行タタキ、内面には弧状の当具痕が残る。

**瓦 (629～634)** 629～633 は平瓦である。焼成は硬質で灰色を呈するものや、軟質で橙色を呈するものがある。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残る、端部は面取りする。凸面はナデで、629・631・632 はタタキの痕跡が残る。633 は凹面に線刻がある。634 は丸瓦で、摩滅のため調整は不明であるが、凹面に模骨痕が残る。

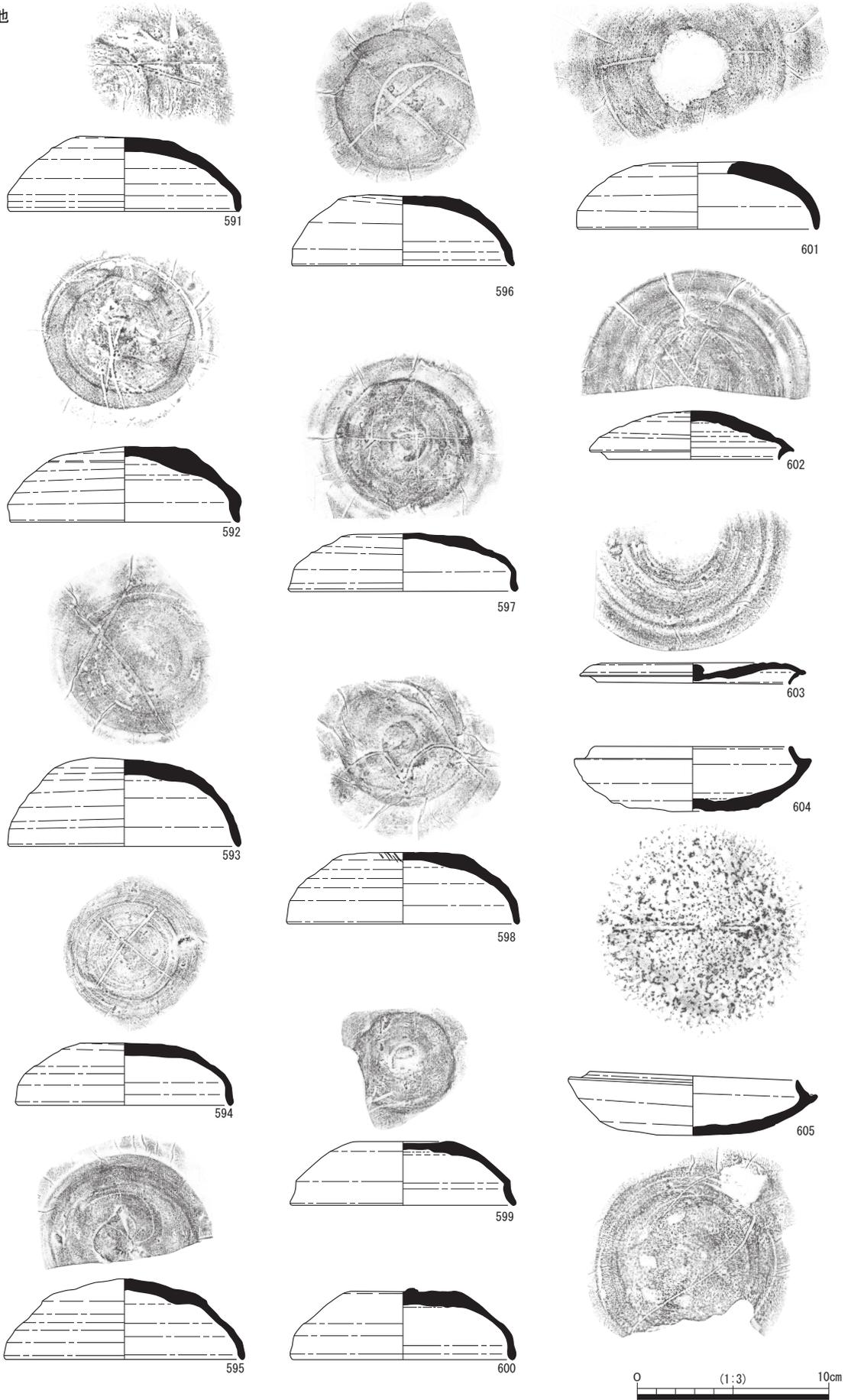
**土製品 (635)** 陶製紡錘車である。降灰のため調整は不明である。

### (3) 小結

2号窯は地下式窖窯で、1号窯に近い規模・構造と考えられる。平面寸胴形で、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。煙道部の一部に天井部を確認した。窯体内で出土した須恵器は杯Bも含むが、主体は杯Hである。蓋・身ともに口径10～12cmほどで、ヘラケズリを施さないものもあることからIVB期に位置づけられる。また、初期瓦が複数出土しており、瓦陶兼業窯である。瓦は圧倒的に平瓦が多く、丸瓦4点のほか熨斗瓦が1点ある。

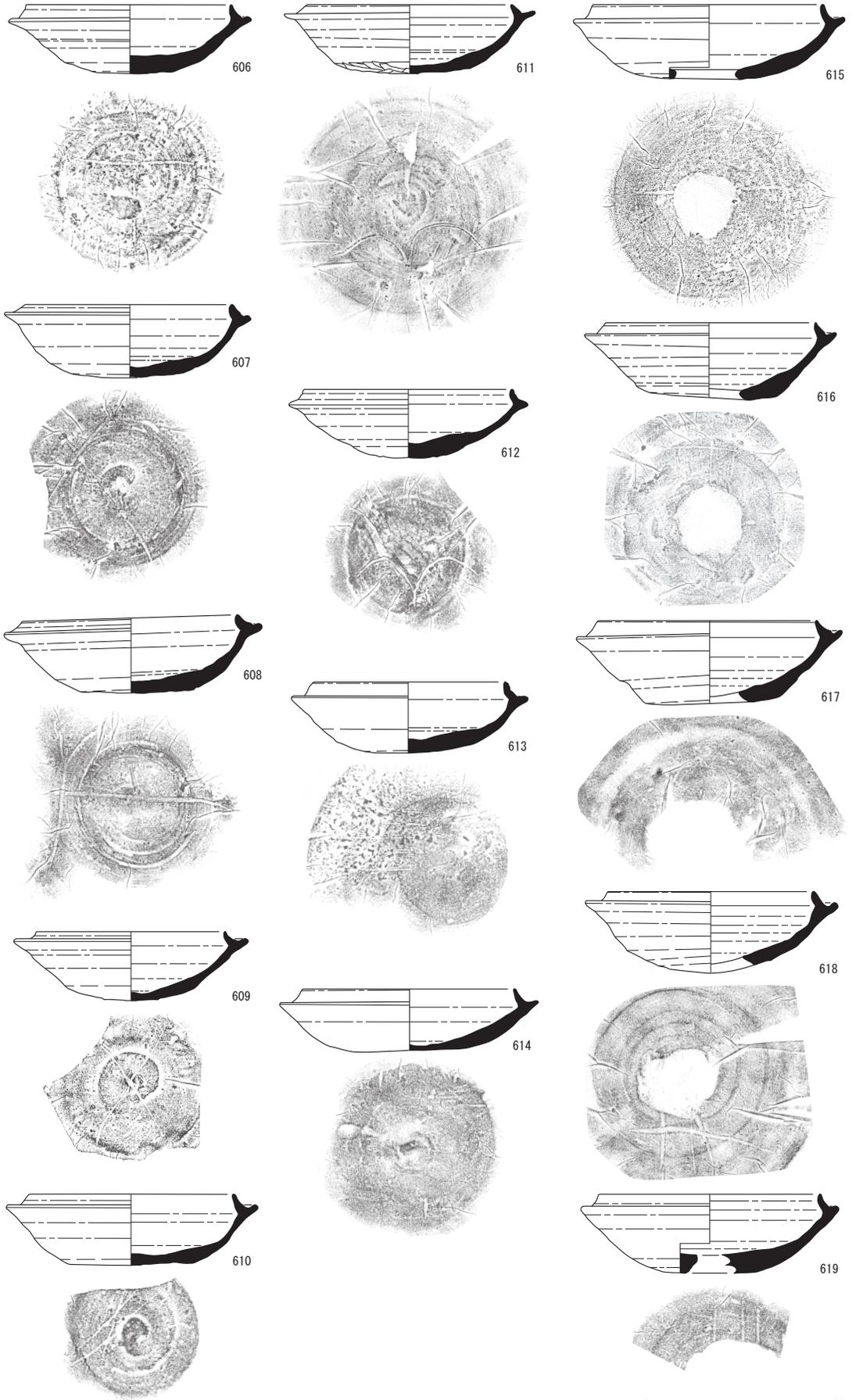
その他

大谷窯跡群



第 73 図 2 号窯跡出土遺物実測図⑳ (1/3)

その他



第74図 2号窯跡出土遺物実測図② (1/3)